由　来

予州大洲藩三代藩主加藤泰恒が蓬莱山が龍の臥す姿に似ていることから"臥龍"と命名したとされる。清流肱川河畔で最も優れたこの景勝地に初めて入ったのは、1595年に豊臣秀吉の命で大洲を治めた藤堂高虎の重臣、渡辺勘兵衛。その後、この地をこよなく愛した泰恒公は吉野の桜、龍田の楓を移植し、庭に一層の風致を加えた。幕末までは歴代藩主の遊賞地だったが、明治維新後は補修されることもなく自然荒廃した。

現在の山荘は、幕末の大洲藩御用商人・大坂屋與一衛(現 城甲家)の長女ワキ(1858年生)の婿養子となった貿易商・河内寅次郎(1853年・現 大洲市新谷生、1887年頃神戸で喜多組創設)が、余生を故郷で過ごしたいという思いから財を投じ、地元大洲の大工中野虎雄を棟梁に、その思いを千家十職らに託して築いたとされる。1897年に庭園整備を開始、1900年9月から不老庵を、1903年から臥龍院の建築を開始し、1907年に完成した。しかし、寅次郎が完成した臥龍院に住むことはなく、1909年に神戸でその生涯を終える。ワキの実妹タメ(1864年生)の婿養子・乙吉(現 宇和島市出身)の孫にあたる当主・故城甲昭三氏は、建築には当時神戸にいた寅次郎に代わって乙吉が現場の采配をふるっていたと記憶を明らかにしている。

中秋の名月には不老庵の竹網代張り天井に、臥龍淵の水面に反射する月明かりが射し込むという、他に類を見ない匠の技を施した臥龍山荘は、2011年5月にミシュラン・グリーンガイド・ジャポンに「一つ星」として紹介され、2016年7月には臥龍院、不老庵、文庫の3棟が国の重要文化財に指定された。

河内寅次郎

城甲乙吉

十二支を表す燈籠と大洲藩の蛇の目紋

臥龍山荘・利用案内

- ●観覧時間／午前9:00～午後5:00(午後4:30札止め)
- ●休　館　日／年中無休
- ●観　覧　料／大人…550円　小人(中学生以下)…220円
- ●共通観覧料(大洲城～臥龍山荘)／
  大人…880円　小人(中学生以下)…330円
  無料…1.保護者の同伴する5歳以下
  2.大洲市内に住所を有する65歳以上
  3.身体障害者手帳・療育手帳又は
  精神障害者保健福祉手帳の所持者とその介護者(1名)
- ●交　　通／大洲まちの駅「あさもや」駐車場まで
  - ▸松山ICから車で約45分
  - ▸八幡浜市街から車で約25分
  - ▸JR伊予大洲駅から車で約3分
- ●連　絡　先／〒795-0012 愛媛県大洲市大洲411-2　TEL・FAX.0893-24-3759

■お問い合わせ先
大洲観光総合案内所　〒795-0012 愛媛県大洲市大洲649番地1
TEL.0893-57-6655　FAX.0893-24-7086

※パンフレット中の表現は下記史料から引用しています。
著作兼発行人 小川宗勝『喜多郡の華』小川寶文館〈大正三年(1914年)6月5日〉　2020年10月現在

臥龍山荘庭園

1 乱れ積み

2 末広積み

4 手鞠石

5 玄太石

3 流れ積み

7 潜龍洞(氷室)

8 捨て柱(生きた植木)

6 晩秋の庭園

庭石の新境地

自然の景観を巧みに取り入れた河岸庭園。神戸の庭師とされる「植徳」の10年がかりの作。まず、入口の石積みに目をやる。七段の乱れ積みを右に見て黒門をくぐる。植木の周囲を巧く囲った末広積み、続いて何かを描いている流れ積みの意図が理解できたとき、心憎いばかりの演出に言葉を失う。重厚な雰囲気を醸し出している庭園の飛石は"てまり石""臼石""伽藍礎石"等の銘石が揃い、"玄太石"も見もの。樹木も多く、榎・槇が数百年の深い生命を保ち、苔類も珍種が見られる。

臥龍院（がりゅういん）

屋根は茅葺、農村風寄棟の平屋建て。1903年から4年の工期をかけ最も苦心した臥龍院は、桂離宮・修学院離宮・梨本宮御常御殿などを参考に、相談役には茶室建築家の八木氏を迎えたとされる。施工は大洲、京都の名大工。建物細部は千家十職、絵画は当時の日本画家 鈴木松年に依頼して完成させた、類い希な名建築である。

棟札／1905年2月26日　工匠（棟梁）／中野寅雄
（注）1903年7月着工 1907年2月竣工　※建坪延べ198・延9,000人役

迎礼の間　げいれいのま

割竹を敷台とした玄関には、茶室の露地間の雰囲気が漂う。

千家十職の共演

畫（え）よりも雅（が）なり

※「喜多郡の華」より

霞棚と月に見立てた丸窓

蝙蝠引き手（中川浄益作）

瓢箪の透し彫り

霞月の間　かげつのま

霞を表す三段の違い棚は、床脇の丸窓に奥の仏間の灯明を映し月と見る。鼠色和紙の襖にこうもり型引手、仙台松の一枚板の縁等、匠の細やかな心配りを随所に感じ取れるこころ落ち着く空間である。

花筏　ー春ー

水紋の美　ー夏ー

菊水　ー秋ー

雪輪窓　ー冬ー　（塗りは中村宗哲）

清吹の間　せいすいのま

高い天井、欄間の透し彫り等が夏の涼やかさを感じさせる。書院窓は右に枇杷床、上部は一位の木を用いた全面神棚、欄間は花筏で春。右に水紋の美で夏、左は菊水で秋、振り向けば雪輪窓で冬をあしらう。

鳳凰の透し彫り

数々の透し彫りは、木地師駒澤利斎が桐を用い、また、鳳凰の透し彫りは屋久杉1枚板に彫ったもの。季節が織りなす形象などを巧みに表現している。

時香盤

和時計の一種で河内家旧蔵。底辺に「鋳師洛陽寺町住　寺田治右衛門」と作者銘が刻印されている。所伝によると、第二代藩主加藤泰興が帰依していたことから如法寺開山に至った盤珪禅師（盤珪永琢）が冨士山頂の座禅石で座禅をした際に使用したものとされる。

壱是の間　いっしのま

格調高い書院座敷で丸窓、濡縁、障子戸、天井板等に桂離宮様式が濃く表われている。畳をあげれば能舞台、欄間彫刻は優雅な野菊、鳳凰の透し彫り。縁に座り、川風を感じる庭園の眺めは言葉にならない。

不老庵（ふろうあん）

臥龍淵を足下に見る崖の上に舞台造りに建てた数寄屋造りのこの庵は、そのものを舟と見立てる。穹窿（きゅうりゅう）状竹網代張り一枚天井は、川面の月光反射を狙った巧妙な趣向。床は二間幅の仙台松一枚板を用い、二間の曲がり竹を落とし掛けに、違い棚をつけない簡潔さ。入り口縁続きに大徳寺孤路庵に見るような素朴な意匠の茶室（三畳台目）があり、生きた槇の木を使った「捨て柱」を基準に建てられている。

文庫（ぶんこ）

文書や書物、絵画など大切なものをしまう、一般にいう土蔵。「置き屋根」の屋根に、外壁には舟板やひしぎ竹（割竹）、漆喰を用い、開口部には銅板の扉を配した、実に味わいのある建物。

知止庵（ちしあん）

かつては浴室だった建物を昭和24年茶室に改造。「知止」の扁額は第10代藩主加藤泰済の筆。陽明学者中江藤樹の説いた教えから“知止”という庵名が生まれた。

※千家十職とは、茶道に関わり三千家（表千家・裏千家・武者小路千家）に出入りする塗り師・指物師等、十の職家を表す尊称である。
※発行済みパンフレット等の内容を引用しています。今後、新史実の確認等により、内容が変更される場合がございます。